



代表理事 大神弘太郎氏

**山川里海、森川里海、  
そういう繋がりはとっても  
重要だと思っています。**

博多湾を中心に、海を自分の目で見て肌で感じるダイバーという立場から、海の魅力発信や課題解決に向けた活動を展開する大神弘太郎さん。

海や海に関わる人たちへの愛情溢れる大神さんから教えてもらう博多湾は、森や川などとのつながりを強く持ち、沢山の生きものが生息するととても豊かな海の姿でした。その豊かさに驚くと、「この水中世界を色々な人たちに知ってもらいたいです。そして、一緒に考えていくことが大事だと思っています。」と語ってくださいました。

—ふくおかFUNさんの活動経緯を教えてください。

2014年に設立し、今年で10年になります。大学在学中にダイビングに出会い西表島でレジャーガイドをしたあと、各地でダイビングのインストラクターをやっていました。その後、バックパッカーとして世界中の自然を見てまわっている時に東日本大震災が起こり、帰国して被災地の海中の瓦礫撤去などをする中で、社会課題と向き合っていくにはチームで活動しなければと思いこの団体を設立しました。

今は「自然と人の繋ぎ役」をテーマに、学術的な話や行政の計画を子どもや企業に分かりやすく翻訳し伝えていく活動をしています。活動の中で大切にしていることは、事実をデータとして伝えていくことです。これからは、経済拠点福岡としての発展と併せて里海作りにアプローチしていく中で、大学や行政と連携しながら、子どもたちの自発的な活動を促していきたいと思っています。



—活動の場である博多湾は今どのような状況ですか？

博多湾には水族館でも見られないような不思議な生きものが生息しています。また、アジやカンパチ、カタクチイワシなどの他にもモンゴウイカの産卵も見られます。タツノオトシゴの仲間もいて、その棲み処にもなっているアマモも生息しています。だけど、これらの生きものが減っている場所がたくさんあるので、アマモの植え付けなどで棲み処を増やす取組みもしています。

活動当初は、いい海というのは「透き通った海」だと思っていましたが、活動を継続していく中で、生きものたちの生育の場になるような「豊かな海」というものが大事なことだと考えるようになりました。今後は、博多湾に関連して、海と川に生息する生きものを調べていきたいと考えています。



—「海と川」というキーワードがありましたが、この10年で博多湾や博多湾につながる川の状況は変わりましたか？

変わったことが大きく2つあります。1つ目は、温暖化の影響を博多湾も顕著に受けていて、今まで冬を越せなかった生きものが越冬するようになっていることです。博多湾内ではサンゴが、また、小呂島周辺（博多湾外）ではクマノミを観測しました。これらの生物が冬も博多湾に棲み続けるようになり、そこに本来生息すべきだった種が棲めなくなっています。

2つ目は、海中が貧酸素になり微生物が死んで堆積するという水中のシルト化があります。室見川河口の水深2m位の砂は良質な砂ですが、水深が進む程状況は悪くなり、微生物の死骸が溜まって生きものが暮らしにくい海になっています。

去年、室見川の砂を入れたところで、海藻を初観測しました。ですが、1年前のところを見るともうシルトが堆積しているという状況です。大きなアサリは博多湾で激減していて、他にもアカモクが減り、サザエやアワビが獲れなくなっている場所もあります。漁師さんたちから、川砂が入ってこないという話も聞きます。



—つまり博多湾の環境は10年前に比べて悪くなったということですか？

良くなったところも悪くなったところもありますが、海藻は減っています。ブルーカーボンの観点からは、水中の炭素固定機能が重要なので、そこを食い止めないといけないと思います。ネイチャーポジティブの観点からは、人間の手が入らずとも生きものが自活できるサイクルができないといけませんが、そこに至るまでは、まだ時間がかかると思っています。

—ということは、単純に人の手が入ればいいという訳ではないんですね。

そうですね。博多湾は環境依存しやすく川の影響を受けやすい場所です。ですから、川の水が良質であること、ひいては森が健全であることはとても大事です。緑の基本計画がしっかり遂行されて良質な水が川から海に注がれ、きちんと森、川、海の接地面があることがとても大事だと思います。

それに加え、僕たちが設立から9年間かけて見たものや感じたことをデータ化し、説得力を持って見せていくことも大事だと感じています。



—冒頭でアマモの植え付けのお話がありました。

アマモの採取は大変で、水中でスコップを持ち、泥や汚れをとって綺麗にして適切な長さにして植え替えます。同じ博多湾内の群生地から間引いてきたアマモを、去年は1,654本を植え付けました。種を回収するためには初夏にアマモを採取し、それを真夏まで熟成させ、種を選別してから冷蔵保存ののちに種まきイベントで使用するという流れです。種は2万粒採取しました。アマモの多いエリアのものを採取して、足りていないエリアに植え付ける作業をしていますが、外的要因でなかなか増えないのが実情です。

—活動に賛同する人が増えたり、連携の幅が広がったりと、活動の注目度が増していると思いますが、今後はどのようなビジョンを描かれているのでしょうか？

最近、清掃活動にダイビングショップや企業、市役所などからも参加をいただいたり、他にも行政と連携して、大学生から保育園の子まで幅広い年代を対象に授業をしたりと、色々な連携を展開しています。

ですが、そのような今だからこそ、自分たちを見つめ直す時と捉え、これからの2年間は「フォーカスオン福岡」をテーマに、特に博多湾の海にこだわり、今一番フレッシュな情報を出し続けられる状態を作ろうとしています。

経済拠点福岡としての発展と併せて里海作りにアプローチしていく中で、大学や行政と連携したり、子どもたちが自発的に動けたりするような活動をしていきたいと思っています。福岡市に住む皆さんと一緒に考えていくことが大切です。

